

伊勢原のトリビア
 「伊勢原」という名の花がある
 市内の園芸農家が交配して作った「伊勢原」はクレマチスの一種のテッセンで、花の直径が20cm前後と大きく、早咲きなのが特徴です。

まちを取り囲む自然と向き合って、共に暮らす

大山阿夫利神社下社や標高375mの聖峰山頂から眺めると、伊勢原が豊かな自然に囲まれていることがよく分かります。古くから自然と向き合い共生する知恵が、このまちでの暮らしをより快適にしてくれました。



PROFILE

かめい たかし
亀井 隆さん
 上谷芝桜愛好会 会長



PROFILE

やない しゅん
柳内 春さん
 クアハウス山小屋 店長



- 1 平成15年当時の渋田川の景色。3色の芝桜が満開となって川岸を彩っている。
- 2 土手の草刈りや掃除などは、愛好会の会員に加えオーナー制度の方々も協力。
- 3 現在の渋田川の様子。花も、川沿いに生け垣が続くまち並みも美しい。

遠方からも見物に訪れる春の風物詩。世代と地域をつなぐ渋田川の芝桜

河畔を鮮やかなピンク色に染める芝桜。シーズンには市内外から見物客がやって来ます。川沿いの3軒の家から徐々に輪が大きくなり、現在、上谷芝桜愛好会の会長を務める亀井隆さんの両親も植えるようになったそうです。「家の前をきれいにしようというので、皆で芝桜の苗を植えたんです。すると人が見に来るようになり、だったら、もっときれいにしよう。それを見てさらに隣の家も植えるようになって...という具合に、どんどん範囲が広がっていったんです」。

渋田川は治水状態が良く、花にとって適した環境であることも、最初に植えた人々は分かっていたのではないかと

と亀井さんは語ります。「一番の苦労は芝桜の敵、雑草を刈ることです。夏前には欠かせません。活動を始めた人たちが高齢になってからは、近所の有志が手伝うようになりました」。

現在は子の世代が会を受け継ぎ、市や関係機関をはじめ多くの協力の下、草刈りや苗の植え替え、川の掃除のほか、芝桜まつりの運営などを行っています。また、企業や財団とのオーナー制度を立ち上げるなど、持続可能な活動に向けた努力も重ねています。

先人が残した名所が、時代を超えて世代や地域のつながりという花を咲かせています。

伊勢原で暮らして分かる自然の魅力。居心地のいい地域のつながり

日向地区の自然の中、アウトドアアクティビティが楽しめるキャンプ場には多くの人々が訪れます。柳内春さんは約7年前に東京都から移住し、祖父の経営する施設を手伝い始めました。「50年以上前から祖父が溪流釣りの施設をやっていて、釣った魚を食べたいという人のために、バーベキューをできるようにしたのが始まりです。その後、約25年前にレストランや風呂を作り、現在の『クアハウス山小屋』として営業を始めました。当初はバーベキューや登山帰りのお客さんの利用が多かったようですが、近ごろはキャンプの利用者も増えてきて、施設の中心になってきています」。

日向周辺の自然の特長は、大山が国定公園のため景観が守られていて、四季折々の山野草や野生動物に出会えること。また、周辺の溪流は浅瀬なので安全に遊べます。「毎年、台風や豪雨の後には川の形が変わるので、そのたびに設営し直します。草刈りもしなければなりません。きちんと手入れしてこそ、自然を楽しめる環境が守られると思います」。

移住して思うのは自然の中で過ごす心地よさ、という柳内さん。アウトドア文化が育つ以前から、自然と市民を結ぶ役割を担ってきたこの場所。これからも大切に守り、未来につないでいきたいと考えています。



- 1 溪流沿いのバーベキュー施設。とれたての新鮮な魚が味わえる。
- 2 キャンプ場は林の中にあり、森林浴やバードウォッチングも楽しめる。
- 3 キャンプ場の近くにある溪流は家族連れにも人気。

豊かな自然の中で成長してきたまち **商業**

伊勢原のトリビア

現在の伊勢原駅周辺には、昔から市(いち)が立っていた。今の中央通り一帯にあった伊勢原村には、明治初期から商家が並び、地域で唯一の定期市がにぎわいを見せていたといえます。

50th

人々の暮らしに寄り添い、豊かにしてきた商人魂

50年で機能的な現代生活を送るための環境は変化し、駅周辺には市民の生活を支える施設がそろっています。大型店舗や複合施設なども誕生する中、個人商店も時代に合わせてその形を変えてきました。



PROFILE

たかはし ひろまさ

高橋 宏昌さん

テーエス瓦斯株式会社 代表取締役社長



PROFILE

おぬま しゅんすけ

小沼 俊輔さん

有限会社小沼酒店



- 1 店舗のある竜神通り。高橋さんや界隈の商店で企画して名付け、特徴づけた。
- 2 昭和40年代の通り。奥に見えるのが伊勢原駅。
- 3 昭和46年、市制施行を記念した祝賀行事でのパレードの様子。

大切なのは地域の一体感と活性化。通りに「竜神通り」と名付け親しみやすく

伊勢原駅北口にあるテーエス瓦斯は半世紀以上地元を見続けてきた、まちのガス屋さんです。2代目の高橋宏昌さんは、市制施行の祝賀行事をよく覚えていたといいます。

「私は小学校6年生で、中学生たちのちょうちん行列を見物しました。昭和46年は高度経済成長期がちょうど頂点に達する時期。今日より明日はもっとよくなるという気分の時代でした。そんなときに町から市になったので、子ども心にも高揚感があったのを鮮明に覚えています」。

3年後の49年にはオイルショックで経済が下向きに。以来、山あり谷ありの景気の荒波を、一様に乗り越えてき

ました。店舗では昭和29年からプロパンガスを扱い始めましたが、都市ガスより歴史が浅いので、先代が近隣の主婦たちに宣伝して回ったそうです。

「46年当時のお得意さんは約2000〜3000軒、現在はその倍以上います。大型店が増えている今、これからの商人は、何かあったらすぐ駆け付けるなど、お客さんとのつながりを一層大事にしなければなりません」と。

同時に大型店と共同で大売り出しを開催するなど、地域を一体化させる努力も。個人商店と大型店と一緒に盛り上げていく、魅力的なまちづくりを常に思い描いています。

人が楽しく暮らすまちには、外からも人が来る。老舗酒店の3代目が思い描くビジョン

小沼酒店は伊勢原駅南口の大原町商和会に所属する、約60年続く老舗です。小沼俊輔さんはその3代目。市商工会の青年部長としても活動し、異業種の若手部員たちとイベントを開催するなど、市の活性化に力を入れています。また、家業の酒店の経営でも新しい道を探る日々です。

「昔は問屋さんから入ってくる商品を並べて売っていただけでしたが、量販店が増えてからは、他と違う特色が求められるようになりました。それなら、自分の好きな物や作り手の思いが込められた物を、お客さんに薦めたいと考えたんです」。

そこで地方の酒蔵を訪問し、独自の

ルートでおいしい日本酒を仕入れるようになりました。また伊勢原小売酒商組合の取り組みで作られたリキュール「みかんのお酒」は、味の開発からラベルのデザインまで参加。今後も地域の若手がそれぞれの仕事の価値やこだわり、技術を発信、宣伝できる場を作りたいと語る小沼さん。

「伊勢原は古いお店も多く、文化や伝統工芸品、農産物も豊かです。それらの価値をさらに高めて、これまでの良さを生かしながら、まちの魅力づくりをしていきたいです。暮らしている人が幸せであれば、外からも人が来る。そんなまちづくりをしていきたいと思っています」。



- 1 商工会青年部や独自のつながりで地域のイベントに出店し、市民と交流。
- 2 イベントや試飲会を行う際は、互いにメニューを提供するなど協力し合う。
- 3 小沼酒店のある駅南口周辺。マンションが続々と建設されるなど変化も多い。